

コラム7 「河井清方日記」に見る余震と流言

大地震が発生すると、その直後から多くの余震が発生し、最近の地震観測でも本震の直後には余震を1つずつ区別するのが難しいほどである。関東地震も例外ではなく、むしろ震源の規模が大きい余震の数は、同規模の地震に比べて各段に多かったといわれている(武村雅之, 2003)。本震で被害を受けた人々にとって、余震は恐怖心を煽り、その末に流言飛語を生み出す原因になることも考えられる。

そのような様子を克明に記録した日記が、河井清方の「大地震の記」である(武村雅之, 1999, 2005)。河井清方は、関東地震当時62歳で、静岡県富士郡大宮町(現在の富士宮市)に住み、若い頃には教員、その後は役場に勤め、地震当時は富士浅間神社の^{さかん}主典であった。大宮町は震度が4～5程度で、深刻な被害を受けた場所ではないが、清方には東京方面に2人の娘がおり、その安否を案じる姿が痛々しい。清方は若い頃から日記をつけ、膨大な記録が整理されて今も河井家に伝わっている。その中の第17輯に「大地震の記」という部分があり、1923(大正12)年9月1日の地震発生時から12月31日の間の地震にまつわる話がまとめられている。

その中でも特筆すべきは、余震の揺れを感じるたびに、いつごろどの程度の強さの揺れであったか、その際どんなことが起こったかが、昼夜を分かたず丹念に記されている点である。気象庁による関東地震の余震の震源位置やマグニチュードから大宮町での揺れの強さを推定すると、日記の記録は驚くほどよく対応する。具体的には、余震のうち大宮町に影響が大きいと考えられる静岡県東部地域や近隣の山梨県、神奈川県、東京府及び相模湾で発生したマグニチュード5上の余震の揺れは、9月4日以降ほとんど区別して記載されている。

これに対し、日記の9月1日の記述では、余震の数があまりに多いために、個々の地震について記述は難しいので、“震動数十回”と記されている。また、9月2日は9月1日に比べて数は減少するが“夜来大小の震動連続”、その中で午後9時前後の地震(気象庁によると22時9分伊豆半島中部マグニチュード6.5)は“かなり強烈”と述べられ、この地震のために2晩続きの野宿を決意したことが記されている。9月3日には“前夜来震動十数回”という記述が見られ、1日や2日に比べ、有感地震の数が減少していることがうかがえる。なお、日記の記述と気象庁で決めた余震との対応を見る際に、当時時計が今日ほどどこにでもあるものでないことを考慮すると1時間程度のずれはやむを得ない。

流言については、9月1日には、“針小棒大の流言を放つもの少なからず”とあり、9月2日には、“公私の団体物々しく夜中を戒め各戸亦不眠不休に恟々^{また}として非常を警戒す”、9月3日には“^{ふていママ}不逞鮮人共産義者来襲して暴挙をなす旨の風説あり・・・流説蛮語大いに衆人を惑わす”“富士山容の異変を伝ふるものあり、石室などは跡方もなかるべく三島岳崩壊せりなど風説に聞き、新聞に見ゆ”とある。多くの余震の揺れを感じる中で様々な流言や間違った情報が伝えられた様子がよくわかる。

9月4日になると、日記は個々の余震についての記述をはじめ、強い揺れを感じた場合のみならず、微震、軽震、小震など比較的弱い揺れでも記載されている。9月21日になって、やっと9月1日以来一度も動揺を感じない日が訪れたというほど余震は多かった。そのような中で、流言は強い揺れと呼応して表れるようで、9月4日の“午前五時と午後二時前後の強震”という記述の後に、“午後十時前後より十二時頃までに大震との飛語”。このため“人々不安に消光し家屋内に入ることを避けて天幕にあるもの少なからず”と記されている。

9月5日になると、人々が“常業に復すべく準備”とあるように次第に落ち着きを取り戻すが、9月8日午後6時15分に“一日以後最強なる地震”(18時8分山梨県東部マグニチュード5.8)が起こる。このため、人々は不安に駆られ“再野宿の用意をなす”。そのような中で、“不逞鮮人数十名来襲等の蛮語流説がわき出す”とともに“富士山噴火せると予報するの説あり……甲州に大地震あり甲府全滅せり、^{かじかさわ}鯀沢陥没せりなど伝ふるものあり”と流言が飛び交う状況になる。さらに、余震による強震が加わり、人々は翌日も“浮説に惑わされ終日通宵不安に消光”をしたと記されている。

次の強震は9月15日午前3時(2時41分山梨県東部マグニチュード5.3)にあるが、この地震は9月6日の午後6時の余震に比べマグニチュードが小さいこともあり、揺れがやや弱かったためか、対応する流言の記述はない。これに対し、9月19日の深更のやや大きい揺れの地震(4時43分東京府マグニチュード3.7に対応か)については、“今夕六時より十二時までの間に強度の地震あるべし”という浮説が出たようである。

続いて、9月29日12時前後に強震がある(12時0分山梨県東部マグニチュード5.3)。さらに、10月2日に“昨今台湾、大坂、大島等に稍強き地震連発し人々恟々たり”とある(これらの地震も気象庁の震源リストに対応するものがある)。これらに呼応するように、10月3日には“前夜も十一、二時頃一回ありしという説”があったというように、大地震を予告する流言が流れたようである。

その後、11月23日午前11時40分(11時33分神奈川県マグニチュード6.3)に“稍強く稍長く最近に^{まれ}稀なる地震”があり、マグニチュードが比較的大きく広い範囲で強震となったとみえ、その影響で“翌二十四日の正午頃大なる地震あるべし”という流言が“東京を中心に一府数県に行われ居るものの如し”と書かれている。

以上のように、大地震を予告する流言は、大きな余震の揺れがあると発生する傾向が見える。新聞以外に一般市民への情報伝達手段がなかった当時と比べ、今日のようにマスメディアが発達し、それらを通じて正確な情報を流せば、このような流言の発生を阻止できるかもしれない。しかしながら一方で、情報が氾濫し混乱するかもしれない現代社会において、河井清方の日記に見えるこのような余震と流言との関係は、震災後の混乱の中で起こる流言の特徴の一つとして、今日においても考慮されるべきものであろう。